

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 韓 尚希

宗教における聖者は当該の宗教内に認められるさまざまな価値を集約的に表現する象徴的存在であり、諸価値の人格化ともいべき聖者像を解明することは、宗教研究にとって重要な課題の一つであった。しかるに仏教研究において従来このテーマはあまり注目されず、わずかになされてきた議論も、ミルチャ・エリアーデに始まり、ラ・ヴァレ・プサンに継承された「知恵と経験の対立」という類型論を脱することができなかった。こうした研究の偏りは、仏教文献に現れる「心解脱と慧解脱」「随法行と随信行」「観行者と止行者」など、修行法に関わる一対の教理術語を相互排他的なもののみならず、教理体系全体を異質な修行法によって構成される断片的集成であるとみる見方を助長してきた。

仏教研究におけるこうした聖者像の理解と教理解釈に疑問をもった著者は、厩大な分量のパーリ語の経典および注釈書に散在する種々の聖者概念について網羅的に調査をし、研究の問題点を詳細に洗い直して注目すべき結論に至りついた。パーリ文献において諸聖者は、諸条件が満たされたのちに実現される修行の到達目標として設定されており、その考察から明らかになるものは、異なった種類の宗教類型ではなく、同一の修行体系内部にあって目的達成に向けて機能する諸条件の、複雑な相互関係である。「原始仏教」における聖者論は「原始仏教」の体系的修道論なのである。

この見通しをもって進む本論文は、修道論を構成する重要な術語である、法眼、如理作意、現観、如実知見、信、慧、種姓、聖、解脱、預流、一來、不還、阿羅漢、心解脱、慧解脱などについて、ニカーヤ、アッタカター、アビダンマ文献を渉獵してそれぞれの文脈を精査し、従来の理解をさまざまな点で修正しつつ、これらの術語が体系内部でもつ個々の意義を明らかにした。ことに、単一の文脈で相互排他的に機能するものとして取り扱われてきた「心解脱と慧解脱」「随法行と随信行」「観行者と止行者」等の対概念が、複層化された文脈で相互補完的に機能する一対の要素であることを明らかにしたのは、従来の学界の理解に大きな変更を迫る重要な成果である。引用された翻訳に残された訳語の不統一や部分的な不正確さ、注釈書の段階であらたに織り込まれたと思われる解釈に対する扱いの問題など、いくつかの点で再考の余地は残されてはいるものの、翻訳の存在しなかった『人施設論アッタカター（注釈書）』を和訳したことをはじめ、本論文が斯学に対してなした貢献は大きい。

以上の評価と判断をもって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位の授与に値するとの結論にいたった。